

自己評価および外部評価票

「自己評価の実施状況(太枠囲み部分)」に記入をお願いします。(セル内の改行は、(Alt+)- + (Enter+)-です。)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
理念に基づく運営					
1	(1)	理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	玄関先に大きく掲げてある。理念の実践は、地域の中に浸透していること実践できていると考えている。理念はある。パンフレット等の記載や事業所内に掲示されていて、役員、管理者、職員は理念を共有し、サービスの実践につなげている。月一回の社内研修では理念の確認をして、継続的な心がけをしている。	理念は玄関先に掲げてあるのを確認。パンフレットはデータ保存されておりいつでも配布できるようになっている。利用者のペースに合わせ、家庭と同じように過ごせるようゆっくり支援していくことを主眼にし、地域の人がいいつでも入れるよう戸は開放してある。	
2	(2)	事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	家族会や地域推進会議(2ヶ月に1回)を行うことにより、十分とは言えないけれど、交流は出来ていると実感している。また近くの小学校との交流会は継続している。事業所の目の前にある小学校とは、毎年2年生と交流している。子供を通じその親や先生との交流も深まり始め、毎年行う「ちとせ祭り」は地域行事の一つになっている。また近所の方は気軽に寄ってくれる。	協力を払って地区の自治会(本郷地区)とのつながりは作っているが、防災協定にはまだ協力してもらえない。地区の小学校との交流は毎月あり、毎年運動会に参加している。近くの人が野菜を届けてくれるなど地域で認知されている様子がわかる。	
3		事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	毎年行う施設の祭りには、ボランティアの方や、地域の人たちを招き、交流を図り、理解を得ている。		
4	(3)	運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では、利用者中心の話し合いになり、日頃の生活そのものを、直接見ていただいている。定期的に開催されている「地域推進会議」のメンバーは近隣地区住民や地区役員で構成されていて、利用者やサービスに関する内容の他に、地域の中で事業所の在り方についても検討されている。	運営推進会議は2か月ごとに開催されている。理事長のネットワークで広域に関係者に集まってもらい意見を聞いている。地元消防団などに訓練の場提供をして防災について研修したりしている。	
5	(4)	市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	施設内で対応しきれないことは、市町村(包括支援センター)に協力を依頼している。包括支援センターに相談して協力も得ている。保健補導員の年間行事として協力も得ており、開所10年の実績と実践により双方向の協力関係が出来ている。	地域包括については相談をすると、入所の空きが出ないように協力してもらえるので状況の連絡などして情報交換している。保健補導員についてはグループ活動の年間計画の中でボランティアに入ってもらったり協力関係は良好である。	
6	(5)	身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	基本的には、拘束はしない。しかし状況に応じてはせざるを得ない状況も考えて、指針マニュアルを作成している。重度の利用者が多いが、統一した職員の対応により、拘束しないケアを徹底している。緊急時や利用者の状態が変わったときなどは、毎日開催しているミニカンファレンスで直ちに話し合い、その結果を実践している。	身体拘束をしないための指針、マニュアルを作成してある。これに基づいて所内研修を実施したり、壁に貼ってあるマニュアルについて職員間で確認したりしている。玄関の戸は開放してあり、実際に拘束は見られない。	
7		虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	マニュアルは作成しています。認知症対応施設としての、教えは浸透しているもので、虐待はないと確信している。		

グループホームさわやか千歳

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	当施設には、数名の生活保護の対象者がいます。この方の金銭管理は公的な方法として社協の金銭管理が入っています。また権利擁護の研修も学んでいる。		
9		契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約書や重要事項の説明書等十分説明はしているつもりです。理解出来ているかは疑問です。またそのことについての質問や疑問はほとんどないようです。		
10	(6)	運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	地域性もあり家族や地域からの訴えや評価が少なく、そのことが課題でもあると考えている。家族会や、推進会議への出席を積極的に促している。また家族の面接時には職員は意識的に声掛けを行い状況報告をしたり、家族から話をよく聞くようにしている。	原則月々の支払いは現金になっているので、月1回は家族、親族の来所があるのでその時に話を聞くように努めている。只、家族などには預かってもらっているという認識が強いので、なかなか積極的な意見は聞かれにくいところがある。	
11	(7)	運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月1回のカンファレンス時に運営状態や、経営状態の説明を行っている。変則勤務にてリーダー制をとり意見などはリーダーが集約している。勤務間で意見交換や申し送りなどがなされている。月1回のカンファレンスに2時間くらい設けている。また随時個人面談なども行なっている。	現在34人の職員がいるが、健康診断の結果メンタルに問題のある職員が2割ほどいた。週に1回の臨床心理士の面談と管理職が個人面接をしている。利用者対応についてはカンファレンス時に職員意見の集約に努めていることがわかる。	職員は楽しく生き生きと仕事をしている様子が感じられるが、特に新人については他施設での研修などを取り入れていくことも必要かと思えます。
12		就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	平成25年度職務規定を改定し、有給休暇や給与面等状況に応じて改善を行い現在実施中である。平成26年度から退職金制度を導入した。また、有資格者に対しては、資格に応じた手当支給も行っている。積極的に資格取得へともめている。		
13		職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修制度を利用し、研修の義務化と、希望研修を募っている。研修日は、勤務扱いとする等の工夫はおこなっている。		
14		同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	各機関で行う研究会や、研修会には毎月参加し、同業者と良い交流をさせてもらっている。スタッフの参加も義務付けている。		

グループホームさわやか千歳

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用初日はかなりの時間を要し説明を行い本人ならび、家族とのコミュニケーションを取る。各担当者を決めて関わっている。本人の意に添うよう努めている。		
16		初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	十分な説明と同意に心がけている。また家族会、行事等には家族に出席を呼び掛けている。		
17		初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	個々の方が皆違うように、個々の方の対応も違い、支援が必要か模索しながら対応してきた。また、これからも模索しながら対応したい。		
18		本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	設立10年が過ぎる。試行錯誤を繰り返して行ってきた。利用者のどんな小さな声も聴く姿勢を持ってきた。関わりは日々違うかもしれないが、理念に添いたい。		
19		本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	どこで生活していても家族の一員、その家族、親戚とは切っても切り離せない絆がある。家族の方の思いは尚の事、家族もこの入居者と同じに大切だと考えている。		
20	(8)	馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族を通じて、いつでも、会いに来て頂ける様にと、依頼している。また、行きたい所等は、出来るだけ配慮し、思いに添うよう対応している。普段の生活の中で、気がついたことや、家族の声などはオリジナルノートに記載し、月1回のカンファレンスや介護計画作成やモニタリングなどに反映して支援している。	月1回の家族訪問はあるができるだけ来てもらえるように呼びかけている。面会ノートなんでもノートとしてのオリジナルノートに記録を残している。これについてカンファレンスなどで話し介護計画に乗せている。	相談記録などの整理をして職員全員が必ず確認できるシステムづくりを検討してください。
21		利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	個々の利用者は長い人生違う環境で暮らしてこれ、接点を見つけにくい部分が多いが、共に暮らしていることで、疑似家族のような関係が出来ている。		

グループホームさわやか千歳

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去された後は接点が少なく難しい。久しく家族に会うこともあり、そのような時はいつの間にか入居していたころに戻って話が弾んでしまう。しかしその後のフォローまではいたっていない。		
その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人ひとり違うケアは基本である。プラン作成も個々の状況に沿って立てている。必要時はカンファレンスを行い、状況を見ながらモニタリングを行う。必要に応じて再作成、継続の判断を行う。情報ノートを作り、日々の生活の中で気が付いたことなどをすぐに記入している。そして、毎日その気がついた事や情報ノートを参考に短時間でも、何回でも話し合いをするように努めている。また、その人を知るためにセンター方式が有効と思われ継続している。	利用者一人一人の日々の変化と行動感情の変化などを情報ノートに記して全員で共有している。気が付いた人の提案によって利用者の生活に寄り添えるよう頻繁にミニカンファレンスを開いて対応している様子がわかる。利用者本人の主体性を重点に置いて支援している。	(8)と同様ですが記録書類のファイルの仕方を検討ください。
24		これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	2年3年と一緒に生活している事で、その人の生活暦や暮らし方がよくわかる。短期記憶については、思い出せないが、若かったころの楽しい思い出は良く話してくれる。		
25		暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日必ず一回はバイタルサインを行い、体調管理は出来ている。協力医も月2回、訪問看護月1回往診にきてくれる。また、個々の生活パターンの把握にも努めている。		
26	(10)	チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	計画作成担当者が中心となり計画を行い、状況に応じてカンファレンスを行う。また定期的にモニタリングも行いケアプランに沿ったケアになるよう努力している。職員全員が参加出来るセンター方式を利用、継続している。その記録や情報ノートをもとにカンファレンスして情報の共有、対応の確認をしている。気づくこと、記録をすることから介護計画の作成、実践を繰り返し行っている。職員全員の力量アップも考え所内研修だけでなく、所外の研修も積極的に参加して行く。	月1回家族が来所したときにははできるだけ希望や意見を聞きだす努力をしている。又センター方式で利用者本人の意向を聞き出している。情報ノートの活用、カンファレンスを綿密に行い本人の意向に沿った計画作成に努めていることがわかる。	
27		個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個々のファイルがあり、毎日状況の記録は行っている。昼間と夜間の記録は色を変えて記載している。入居者に対して介護者がどのように援助しているか状況に応じては、出来るだけ細かな記載方法を取るよう促している。		
28		一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	毎日一人ひとりの状況には、変化はある。出来るだけ個々の対応になるよう心がけている。		

グループホームさわやか千歳

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の会や催し物等出席することで入居者の理解が増えると考えている。機会があれば、なるべく出掛けるようにしている。また、施設に足を運んでもらえるように声かけをさせて頂いている。		
30	(11)	かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医が、往診して下さることで家族との時間も取れている。その上で必要な説明も行っている。定期往診や緊急時などの対応はしてもらっている。また担当医が利用者や家族の心情など理解しようと努めながら対応してもらっている。連携は出来ている。	担当医が月2回の往診をしている。家族への説明もしてもらえるので安心感がある。又看護師は月1回の定期訪問があり、又自社の訪問看護ステーションとの連携で緊急時には駆けつけてくれるなど体制は良好である。突然死の方に対する対応も説明がきちんとされ家族関係者の納得を	
31		看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	常勤の看護職員がいることで日常の体調管理は出来ている。協力医やかかりつけ医との情報交換も行っている。		
32		入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	協力医との間では意思疎通が出来ている。定期的な往診等スムーズに執り行われている。心良く引き受けてくださる。		
33	(12)	重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化や終末期に向けた取り組みとして、入居当初より終末期の意向を聞いて、どなたからも同意書を頂いている。医療体制加算を行っていることから、契約書と同等の意味を持っている。当施設においても7人の看取りを行ってきた。事業所には看護師がいて、些細な状態の変化も重要と考えて家族に伝えて情報の共有をしている。協力病院、かかりつけ医、所長、家族、職員が参加している話し合いは記録があり、状態の変化の履歴が確認でき、家族の迷いや思いを関係者が受け入れる体制が出来ていて、穏やかな終末期を迎えている。	入所時に終末期の対応について確認した同意書を家族に書いてもらい保管している。ホームの看護師が状態の変化について細かく連絡する中で、看取りに向けて認識の共有を図っている。	終末期の容態は徐々に変化していきます。又家族の気持ちも揺れていくので、変化に応じた確認を適時に細かく実施していくことを希望します。
34		急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	利用者の急変時には、マニュアルを作成し職員に指導し発生時に備えている。		
35	(13)	災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練も定期的に行っている。平成23年6月全館スプリンクラー設置、消防への通報装置の設置も行った。避難訓練は年2回行っている。今年度の2回目はこれから実施の予定。毎年地域での避難訓練を消防署と連携している。夜間想定避難訓練や火災時の避難訓練のみではなく地震時の訓練も実施していて、マニュアルも種別ごと整備されている。他様々なイメージトレーニングもチャレンジしている。	スプリンクラーの設置、消防署への緊急通報装置の設置確認。避難誘導のマニュアルができています。消防署の支援で様々な災害を想定した避難訓練が年2回実施できています。	災害時には職員のみでは対応が厳しいときもあります。近隣の方たちの応援体制を早急に構築してください。

グループホームさわやか千歳

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人の人としての尊厳を柱に、言葉掛け、個々にあった対応を日々心がけている。ユニット個室でもあることが重度の方には対応しきれないことがある。人によっては名字、名前をよんだり、場面で変化することもあるが、基本的にはみなさん「さん」をつけて呼んでいる。また一人ひとりの人格を尊重していると思われる言葉かけや、考え方など職員から実際伺うことができた。	具体的には、トイレでは必ずひざ掛けを、部屋に入るときはロックをするなどして、名前は本人の希望で呼ぶこともあるが基本的にはさん付けで呼ぶようにしている。本人の意向尊重から、どうしたいのかという言葉必ず掛けるようにしている。	
37		利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	どんな些細なことでも行う前には必ず本人に説明をしたり、本人の意向を確認をして同意を得ることを職員に実践指導している。出来る限り本人の意思で出来る環境作りを心掛けている。		
38		日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	介護する職員のペースになりがちな行為や支援を、利用者本位になるような支援にと努力している。		
39		身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入浴と更衣は日常的に、洋服も本人に聞きながら選んでいる。隔月に1回理容師さんが見え髪をカットしてくれる。本人の好みを重視しており、無理の方には職員が配慮して伝えている。		
40	(15)	食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	介護スタッフが、バラエティに富んだメニューを作り、利用者と一緒にを前提に食事作りや片付けを楽しんでいる。週1回のお楽しみメニューとして、利用者、希望や季節感のあるメニュー作りとアンケート等の嗜好調査にも取り組んでいる。随時、献立表は作成され食事内容の検討会も開かれている。また口頭で日々会話の中で確認などしている。それぞれ出来ることを分担し、準備、片付けなどしている。	基本メニュー表に沿って食事作りがされているがパターン化したものに手を加えてお楽しみ食行事の提供をしている。アンケートで食べたいものを聞いたりして、食べる事を楽しむ事が出来るよう努力されている様子がわかる。	
41		栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量や水分量は必要時に応じてチェックし、朝のカンファレンスでスタッフが把握するよう指示している。		
42		口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後は必ず義歯と口腔内の洗浄は行う。また夜間は口腔ケア後、義歯は洗浄液の中に漬けておくようにしている。		

グループホームさわやか千歳

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	昼間はオムツの使用を出来るだけ行わず、時間を見ては、一人ひとりにあったトイレ誘導を行っている。重度化している利用者が多いので、様子を見て誘導している。状態によっては1~2時間おきに誘導することもある。	一人一人の排せつパターンによってタイムスケジュールを作って管理している。基本的には昼間はリハビリパンを使用しトイレ誘導をその人に合わせて行っている。夜のアテント使用者は現在3人である。	
44		便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分チェックと下剤服用は不可欠となっている。状況に合わせて協力医や、掛かりつけ医の指示のもと内服している。飲食物には牛乳や繊維物の多い食事を勧め、バランスを考えている。また歩行等促し支援している。		
45	(17)	入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	週2回~3回と決めてあるが、時間は決めておらず状況に合わせて入浴している。時には早朝だったり、夜間だったりすることもある。重度化に伴い、個々の状態を見ながらシャワーチェア、ストレッチャーも使用している。	入りたくないという人もいるが、平均して週2~3回は全員入浴している。入りたがらない人については昼夜を問わずタイミングをとらえて入浴してもらっている努力が感じられる。どうしても入れない場合は部分浴などをして着替えてもらっている。	
46		安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼食後の昼寝は個々の入居者さんの意思に任せているが出来るだけ短い時間で午睡になるように心がけている。状況に応じて、時間をみはからい起床を促している。		
47		服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	入居者さんは、ほぼ全員服薬していることから服薬管理は不可欠と考えている。しっかり飲み込むまで確認している。またその後の状態の観察も行っている。		
48		役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	毎日の生活の中で、中軽度にかかわらず、役割が決まっている。重度の方もスタッフと一緒にやることで、出来ることもある。また近くのお店に買い物に出かけ、気分転換されている。		
49	(18)	日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	一部の軽度の方は定期的に外出されている。他の方も、行事に沿って外出されている。また家族に依頼して外出されることもある。個々の買い物や外食があれば個々に応じている。地域の果樹園の協力があり果物狩り、小学校の運動会などの参加も多くある。ボランティアの協力もあり行事参加が実現している。	買い物、選挙の投票などのための外出がそれぞれ2名。家族同伴で外出があったり人によって差異はあるが出かけている。又月に1回はスタッフが付き添って集団外食なども実施しており、利用者の希望にそったり、連れ出しなどで気分転換を図ることもされているようだ。	

グループホームさわやか千歳

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	簡単な金銭管理が可能な対象者には外出時に限らずいくら渡している。自己管理が出来ない方にはほしい物等家族に確認しながら施設サイドで購入する。購入したものは月末領収書と共に家族に渡し確認印を頂いている。		
51		電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話、手紙等の理解可能で希望の方々には手配したり、依頼された時は代筆も行う。また電話の取次ぎも行う。		
52	(19)	居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	全体的に狭い空間なので心地よさは期待出来ない。でも出来る限り心地良く生活出来るように心がけている。利用者の作成した小物や絵が飾られ、またお花なども置き、生活感を優先し、清潔に配慮し心地良く生活出来るように努めている。	利用者の作品を飾ったり、できる人は雑巾を縫ったり、生活の張り合いの演出がされている。個人作品ブックなども作成され利用者の生活の場づくりへの努力がみられる	
53		共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食堂においては個々の座るテーブルの位置が決まっており、テリーの侵害がないような配慮はしている。本人の好きな場所の配慮も行っている。		
54	(20)	居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	各個室は本人にとって一番過ごし易く落ち着く場所だと考えている。入居当時に、なじみの物を持参した大切な物の配慮も考えている。各お部屋は大切にしてきたものなどが置かれたり、趣味や特技がいかがされたものなどが整備されている。居心地よさそうにしている。	ひ孫の写真、使い慣れた家具いただきもののペット等利用者さんそれぞれに各室をデザインして生活している様子が感じられ温かい雰囲気である。利用者同士の相互扶助もありホームが一体化している。	
55		一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	2/3以上の方は自力での生活能力が乏しいので難しい部分が多い。それでも出来ること、わかることを見極めながら、時間がかかってもらうように支援している。		